

太宰治と山岸外史——書簡に見る文学的格闘——

吉岡 真緒

1 はじめに——出会いの頃

太宰治の知友といえは様々な名前が思い浮かぶが、現存する太宰の手紙の中で最も多くの割合を占める宛先人といえは、山岸外史において他はない。

太宰治の友人であった山岸外史（明37・7・16〜昭52・5・7）は評論家、詩人。東京帝大哲学科卒業。「アカデモス」散文「青い花」「日本浪漫派」同人。疎開先の山形県米沢市で農民生活を経験したことをきっかけに戦後、日本共産党に入党した。主著は透谷文学賞を受賞した「人間キリスト記」（昭13・11 第一書房）や「芥川龍之介」（昭15・3 ぐろりあ・そさえて）「ロダン論」（昭19・1 育英書院）等。太宰は「人間キリスト記」その他（「文筆」昭14・7）で紹介文を書いており、また「芥川龍之介」の出版記念会に際してはいろいろと骨を折ったことがわかる書簡を残している。^{*1}

太宰治と山岸外史の交流は、二人の共通の知友だった中村地平が、山岸にまだ企画段階であった同人雑誌「青い花」について語ったことがきっかけとなって始まった。

同人雑誌「青い花」は昭和九年九月中旬ごろに太宰・今官一らを中心として企画され、同年十二月に創刊号が発行された。全一冊。巻頭には太宰治の「ロマネスク」が載せられた。誌名は、ドイツ浪漫派詩人ノヴァーリスの小説にちなんで太宰が名付けた。「青い花」に対する太宰の意気込みのほどは、昭和九年九月十三日付、久保隆一郎宛書簡に知ることが出来る。

久保兄

その後どうしてゐます。私は先月末に三島から帰りました。貴兄はいつごろお帰りですか。なるべく早く帰つて下さい。

実は私たちの会が中心になつて、この秋から、歴史的な文学運動をしたいと思つてゐるのですが、貴兄にもぜひ参加していただきたく、大至急御帰京下さい。まだ秘密にしてゐるのです。雑誌の名は「青い花」。ぜひとも文学史にのこる運動をします。

のるかそるかやつてみるつもりであります。地平、今官ともに大熱狂です。くはしくは御面談。下手なこ

とはしないつもり。

一日も早く御帰京の日を待つ。

右の書簡で「青い花」への太宰の熱は十分に伝わってくるが、次に挙げる昭和九年十一月十六日付、山岸宛書簡では、太宰が原稿集めや事務連絡も行っていたことがわかり、精神面でも実務面でも太宰が「青い花」の中心になっていたことが知られる。

そんなことを言はないで書いて呉れたら、どんなもんぢや。

十八日まで、よいさうだ。ひとつ書け!!!

津村信夫君にも、詩だけでよいから、送るやうに電話で言つてやつて下さい。

たのみます。

あはれ、太宰治をかかる屈辱に……。

「青い花」の企画が立ち上がって間もない頃に中村地平から同誌のことを聞いた山岸は、その誌名にひどく惹かれたという。当時「紋章」と「禽獣」の作家たちで川端康成に「佐藤春夫論」で佐藤春夫に認められて知遇を得ていた山岸は、駆け出しの評論家として認められ始めていたころであったが、批評家としてのあり方に疑問を感じ始め、自由な発表媒体を探していたところであった。山岸の著書『人間太宰治』によると、中村から話を聞いてすぐに「青い

花」の命名者である太宰に会うことを決めた山岸は、中村に地図を書いてもらって太宰を訪問したという。当時太宰は、荻窪駅近くの天沼一丁目一三六番地の飛鳥方の二階に、最初の妻である小山初代と住んでいた。会つてすぐに、荻窪に向かう電車の中で浮かんできた「われら、太陽のごとく生きん」「われらは、神なり」という言葉を「青い花」の扉に入れるよう提案した山岸に、太宰は最初当惑気味だったようだが、二人はすぐに意気投合し、この後深く関わり合うようになる。この山岸の言葉は採用されなかったが、年月不詳（全集では推定昭和九年）二日付、津村信夫宛書簡にこの言葉を意識したと思われる一文がある。

突然でおそれいます。

先日 中村君からも申しあげた筈ですが、みんな「青い花」を起さうと思ふのですが、いかがですか。はひりませんか。お誘ひいたします。

同人には、イヤなヤツはひとりもゐないと信じます。他の同人雑誌とは少しちがつて、ずゑぶん わがままなものになることと思つてゐます。同人すべて、われは神なりの自負を持つてゐるやうな有様なので、もちろん各人各説であります。なんだか、みんな「青い花」の香気で、ひとすぢ、つながつてゐます。そんな気がいたします。

右の書簡でわかるように、山岸にしても太宰にしても個性が強い同人の集まりだった。そのうえ、次に挙げる昭和九年十二月二十四日付、山岸宛書簡でわかるように原稿と会費の集まりが悪かったため「青い花」二号が出ることはなかった。二号は山岸が編集する予定だった。

お伺ひしてもよいのだが、このごろ、ひとに逢ふのが、こはく(?) (決心がつかず) なかなか行けない。

そろそろ二号の編輯たのみます。同人全部に、原稿と同人費のサインク、「若いひと」にさせたら、どうか。同人会は、どうです。

私、青い花の原稿いま工夫中。

お願い申します。

右の書簡でわかるように太宰は二号発行に意欲的であった。次に挙げるのは、昭和九年十二月十八日付、木山捷平宛書簡である。

しばらく御無沙汰してゐます。雑誌は、いろいろの手ちがひから意外にわるくできて、相すみません。来月からは、頁数もふやし、紙質もよくし、ともかくテイサイに於いても日本一にするつもりです。

どんなことがあつても、「青い花」をつづけて行く覚悟であります。二号の原稿メ切は、十二月三十一日であります。ケツサクを書いて送つて下さい。どんなに

長くてもかまはないのです。いろいろの評判、そのうちひとまとめにしてお送りいたします。兎に角、日本の雑誌であることを疑ひません。そのうち長いたより、必ずします。「青い花の感想」は大好評。

山内祥史「年譜」によると「青い花」が出来たのは十二月十八日頃と推定される。創刊号の日付を鑑みても、右の書簡と先の十二月二十四日付、山岸宛書簡とが、雑誌が出て一月もたないうちに書かれたのは間違いないことから「青い花」への太宰の執着は大変なものであったといえよう。太宰の熱意にもかわからず、先述したような理由で終息した「青い花」はその後、同人雑誌「日本浪漫派」へと合流した。一号で終わったものの、好評を呼んだ「ロマネスク」を発表し作家としての交遊を広げた「青い花」の意味は太宰にとって大きい。そしてその出会いの中で最も深く関わった人物の一人が山岸であった。

2 交遊——書簡をめぐって

現存する山岸外史宛太宰治書簡は、最新版全集に収められているものだけ数えても百七通あり、個人に宛てた太宰の現存する書簡としては最多である。

ぼくは、太宰からもらったハガキを百三十枚ほどもつていた。手紙は三通ほどだったと思う。長女が、太

宰のオジさんからのハガキだということ、大切に保存していたから、戦時中、東北に転住しながらも手もとに残ったのである。昭和九年から、昭和十八年ごろまでのものである。そのうち二十枚ほどは、その東北の田舎にいたころ、求められるままに、訪ねてくる文学の好きな青年たちによってしまった。(「太宰治おぼえがき」^{*4})

山岸がこれだけの数の書簡を保存していたのは、右のように、長女が保存してくれたからであろうし、本人の気質にもよるのである。しかし、何度かの引越しや疎開を経験したことを鑑みれば、山岸の太宰に対する思いの深さを知ることができよう。一方太宰は受け取った書簡は、例外はあるものの保管をしない質だったため太宰宛山岸書簡がどれほどの数であったかは知る由もないが、昭和十一年六月二十四日付、山岸外史宛書簡中「何百枚かのオハガキを貴兄からいただき」との一節は、多少の誇張はあるかもしれないものの、山岸も太宰に同じ数以上の書簡を書き送ったであろうことが推察される。

太宰と書簡について美知子夫人は次のように語っている。太宰が井伏先生に、朝、仕事にとりかかるのが億劫で困ると訴えたら、先生は自分は筆ならしに手紙を書くことにしているよ、とおっしゃった。感心して聞いて

たので未だに忘れない。(中略)

太宰は割合にはがきをよく使い、はがきにびっしり細字で書き込んで発信する一方、儀礼的な場合などには、毛筆の大きい字で書いているので文面の長短からだけでは封書かはがきを区別し難い。はがきの簡便さを好むが、和紙の美しい詩箋や封筒に毛筆で書くことも好きだった。(「回想の太宰治」^{*5})

また檀一雄も「小説太宰治」^{*6}で、朝「おめざ」のビールを飲んだ後に「何通もの葉書を、コソコソと」書いていた太宰を記しており、美知子夫人の証言を裏付けている。山岸宛書簡には特に詩的な書簡が多く、二人が年の近い文学者同士お互いを刺激し合う関係であったことがうかがえる。山岸自身、二人の手紙のやりとりを「手紙による格闘」^{*4}と名付けている。

文士、うたをおくられたら、お返しするのが、
naturalな情と心得る。左に。

青桐の幹あをざりごとくみま
宇地震哉うなみか

貴翰拝誦。

(昭和十年十月二十日付、山岸宛)

不眠のせるか、顔大仰にむくみ不快也。星も見えぬ。梅の花も遠い。夜々、幻聴に悩む。

とこやみの

めしひのままに

鶴のひな

そだちゆくらし

あはれ 太るも

一笑。(昭和十一年一月二十四日付、山岸

宛)

筆ならしのための書簡であったならば、右に挙げた書簡は、まさしく小説的思考回路を開くものであっただろう。

事実、「とこやみの」にはじまる一節は「とこやみの」を「年々や」に変えて「斜陽」で直治の「夕顔日誌」に挿入されている。また、太宰の小説「誰」には、山岸に宛てた太宰の借金申し込みの書簡に山岸が朱で註を入れたものの引用があり、「虚構の春」は、太宰に宛てられた、山岸をはじめとする書簡の引用のモザイクとでもいうべき作品であるとするならば太宰にとって手紙とは、来信にしても発信にしても小説的回路を開く手段である以上のテキストであったと言えよう。

太宰より山岸が五歳年長とはいえ年が近かった二人は、小説家と評論家という立場の違いはあるもののお互いを刺

激し合う緊張感のある関係であったことから、しばしば対立もした。

「虚構の春」で十三番目に挙げられている「吉田潔」の書簡は、山岸外史の書簡として知られている。「俺たち友人にだけでも、けちなポズをよしたら、なにか、損をするのかね。ちよつと、日本中に類のない愚劣頑迷の御手簡、ただいま覗いてみました。太宰！ なんだ。「許す。」とは、なんだ。馬鹿！ ふん、と鼻で笑つて両手にまるめて窓から投げたら、桐の枝に引かかったつけ。」で始まる、太宰を激しく非難する内容の長文書簡に対して書かれたものが次の書簡と推定されている。この怒りの書簡を山岸が書く原因となった太宰の書簡は残っていない。

じゃれてみたのだ。ところが、—おれの爪が君のウロコにひつかかった。老猿と怪龍。雲を呼んで、つひに不足税六銭をとられた。君、僕たちはもう、うつかりじやれることもできない巨いなるものだ。そのうちまた書く。土曜に来ないか。君に対する悪意はみじんもない。(昭和十年八月七日付、山岸宛)

山岸君

今夕の君の手紙、いままた繰りかへして読み、屈辱、無念やるかたなく転てんした。私は侮辱を受けた。しかもかつてないほどの侮辱を。

けれどもぼくは君の友人だ。かうなると、いよいよこの親友と離れたい。君も同じ思ひであらうと思ふ。ソロモンの夢が破れて一匹の蟻。

いまは夜の一時頃だ。

土曜あたりに、また逢つて話したいのだが。

私は、けふよりまた書生にならうと思つてゐる。いままでの僕はたぶん「作家」であつた。七日午前しるす。

おれはしかし、病人ではない。絶対に狂つてゐない。八日朝しるす。

三服のスイミン薬と三本の注射でふらふらだ。昨夜一睡もせず。八日朝しるす。(昭和十年八月八日付、山岸宛)

「いま再び粧つて熾烈を求む」これがカンシヤクのためであつた。ぼく、「熾烈」の点では兄に劣らないと思つてゐる。

誰が何といつても、いまでも、さう確信してゐる。

土曜のバンに來いよ。また船に乗らう。(昭和十年八月八日付、山岸宛)

右の三葉の葉書を見て気付くのは、二日という短い時間になたつづけに送られたという事実である。短い時間に三度書かずにはいられなかつたほど太宰にとって山岸が離れ

がたい存在であつたことが読みとれよう。この場合に限らず、出會つて間もない昭和十年から十一年頃、太宰が山岸に一日の内に複数の書簡を出していたことは珍しくない。右の三つの書簡の内最初の二信を見ると、太宰にとって書簡を書くことが創作活動につながる営為であつたことに改めて気付かされる。

山岸の心の琴線に触れたことと、お互いが互角の才能を有していることを「おれの爪が君のウロコにひつかつた。老猿と怪龍。」と表現する第一信は、この状況を象る作家としての太宰の眼差しを看取できよう。レトリックが読み手である山岸の解釈を誘引し、読まざるを得ない相手へと自らをしている。第二信はさらに興味深い。山岸への批判から再びお互いが不可欠な存在であることを伝え今後の自分のあり方を表明する「七日午前」の手記、前述とは何の脈絡もなく自分が病人でも狂人でもないことを訴える「八日朝」の手記、多量の薬剤投与と不眠とを訴え、直前の「八日朝」の手記を覆す内容を記す第二の「八日朝」の手記という三つの手記によつて構成されている第二信は、何が真実であり、本当に伝えたいことは何かとの問いを無効にし、常に更新される「おれ」を示す。この語り口は、同じ年に「日本浪漫派」に発表された「道化の華」の、常に自らの物語と自分との乖離を訴える書き手「僕」に通底して

いよう。

また「船」に暗示されるように、散見されるデカダンな雰囲気は当時の太宰像を伝えている。この当時、二人は権一雄とともに頻繁に墨東に出入りしており、山岸の著書はその当時の太宰を知る貴重な資料にもなっている。

山岸宛太宰治書簡は昭和十八年十二月を最後に途絶えている。昭和十八年十二月十六日付、山岸宛書簡は、同月二十三日の旅行に一緒に行くという内容であり、その後出されたと全集では推定されている日付不明(推定昭和十八年暮)の山岸宛最後の書簡は、その前日にごちそうになったお礼状であることから、二人は特に何か気まずい理由で音信不通になったわけではないと思われる。昭和十九年三月に山岸が山形に疎開したこと、太宰自身も昭和二十年四月に甲府へ、さらに七月に金木に疎開したこと、戦局の悪化とが音信不通の原因と考えられる。

しかし山岸の著書によると、山岸は戦後、東京に戻った太宰に絶交状を送ったという。^{*2}太宰が疎開先の金木から東京に戻ってきたのは昭和二十一年十一月十四日であるから、絶交状はその後送られたのである。特に喧嘩別れしたわけでもなく、ただ音信が途絶えていただけであろうにもかかわらず、あえて絶交状を山岸が送ったのはなぜだろうか。絶交状を送るに至った心境を山岸ははつきりとは書いてい

ないが、疎開先にも伝わってくる太宰の活躍に対して百姓仕事や青年文化活動に没頭し創作から遠ざかっていた山岸が太宰に距離を感じたからと推察される。その絶交状に山岸は「世の中で最も美しい言葉は、さようならである」と書いたという。山岸があえて絶交状を送ったのは、常に格闘するかのようにお互いの才能をぶつけ合った相手である太宰との関係が自然消滅してしまってもよいものではなく、その関係性は純粹に文学的な関係でなければならなかったからであろう。山岸の潔癖さがうかがえる。この絶交状に対する太宰の返事について山岸は書いていない。おそらく返事はなかったであろう。太宰は沈黙の中に何を伝えようとしたのであろうか。

きみに三度、無言の御返事をさしあげた。三種三様の無言なのだ。それは、君の知つて居るとほりである。君の三枚の葉書が、どれほどの手応へがあつたか、それも、君の推察どほりだ。おそらく、ちがつてはるないだらう。堀に石を投じて、堀の深さをはかる。きみは、堀の深さをはかり当てた。遊びに来てお呉れ。(昭和十一年三月十日付、山岸宛)

これは太宰と山岸が最も深く関わり合っていたころの山岸宛太宰治書簡である。無言の意味は二人にしか知り得ない。

3 書簡というテキスト―「虚構の春」を中心に

書簡集や生前の太宰治を知る人物の証言を読むことで、ある像を浮かび上がらせる。これまでの作業を総括するとそういうことになるだろうか。このような作業で浮かび上がる像は虚像といえは虚像であるが、流通する「太宰治」のイメージを想起させる唯一性を有している。いわゆる「デカダン作家太宰治」といった神話が現在も読者を魅了してやまないのはその証左であろう。「私」を語り手に据えて自らの体験を繰り返し語り直した太宰治は、極めて戦略的に自らの虚像を流通させた作家であった。その最たる作品が「文学界」（昭11・7）に発表された「虚構の春」である。この作品は「太宰治」宛の書簡のみによって成立している。三十六人の発信者による合計八十三通の「太宰治」宛書簡は「師走上旬」「中旬」「下旬」「元旦」に仕分けされ、さらに同じ日に来た書簡は「月日」によって分類されている。書簡という極めて私的な文書が公にされているのみならず、初出では「井伏鱒二」や「佐藤春夫」は実名のまま載せてあり、そのうえ書簡の中には作者太宰が手を加えたものも太宰の全くの虚構もあつたことから、当時大変な物議を醸した。太宰は手紙という方法をよく用いた作家として知られているが、この作品のように複数の人間による来簡のみ

で成り立っている小説はこれ以外にはなく、また日本文学史上においても極めて稀な作品と言つてよい。

鳥居邦朗は「虚構の春」について次のように述べる*⁹。

十二月一か月の間に太宰治に寄せられた手紙というものを、あるいは実物からとり、あるいは捏造して集める。太宰治には一言も語らせず、周囲からの様々の角度からの太宰観を列挙するのである。いわば描くべき太宰を中空化しておいて、その周囲からドーナツ型に照明を集めて、太宰治の陰面を作り上げようとしたのである。

こうして集積された「様々の角度からの太宰観」がいわゆる「太宰神話」をつくりあげ「私の太宰治像」を読者の胸に結ばせる効果についてはすでに様々に論じられていることである*¹⁰。ここでは、他者の眼差しにさらされることで様々な顔（仮面）を獲得しながら「太宰治」へと同定されていく「太宰治」が、意味内容を肥大化させていく記号でしかないことを確認しておく。

「虚構の春」作中にはまた、書簡を取捨選択して分類し「虚構の春」という場に貼り付けた作者太宰治の痕跡がある。書簡群に散見される「（二行あき）」や、書簡群を細かく分類するためのインデックスとなっている「月日」といった情報を、物語の事実として提示できるのは津島修治である

作者太宰治（Ⅱ「虚構の春」の署名者「太宰治」）しかありえない。つまり「太宰治」とは、書簡群に共有され様々に情報を追加される噂の人物「太宰治」であると同時に、この作品を構成し作品化する特権を有している主体として作中に痕跡を残している作者太宰治でもあるのだ。

では作者太宰治はどのように「虚構の春」を創りあげていったのであろうか。

「虚構の春」に設定されている時間は十二月から元旦にかけての一ヶ月間であるが、発信者および発信時期がわかっている書簡を見る限り、実際の来簡時期も順番もバラバラである。つまり「虚構の春」の時間そのものもあからさまな虚構なのだ。また、執筆に際して作者太宰は当然書簡を取捨選択したであろう。選出された書簡が「虚構の春」を構成しているわけだから、太宰は流布する自己像を強化・補強・拡大する書簡を意図的に選び出したと言えるだろう。まさに「虚構の春」である。

「虚構の春」執筆時に居合わせ、自らの書簡も引用された檀一雄は次のような証言を残している。

「虚構の春」を書き上げる時には、丁度私も、船橋の太宰の家に居合わせた。大きなボール箱に、一杯つめられた手紙類を取り出して、部屋中に散乱させ、太宰は、クシヤクシヤになつて、書いていた。締切が間に

合わず、私が代理で、河上徹太郎氏に電話したことも覚えていて。文学界の原稿だった。（中略）

文学界が、市販されて、始めて手に取って読んでみた。手紙の応答を編輯したものだった。しかし、友人らの手紙をよせ集めて自分の状況を相対的に描き出そう、としたところに、太宰らしい誠意と機智がある。私の手紙が出しただけ、一通、収録されていた。黒田重治という名前になっている。ところが黒田重治という名前の手紙は、二通見えていた。

もう一通は私の文体ではない。誰か他の人の手紙を混同したものか？ いや、太宰その人が書いたものにちがいない。すると太宰がこのような手紙を、私から貰うことを希望していたのだと、私はその時思った。

（小説太宰治）

太宰の虚構がどれであるかを特定し、当時の執筆状況を知らせる貴重な証言である。檀が言う「私の手紙」とは「拝啓。その後、失礼して居ります」で始まる（29）の書簡である。檀一雄と特定されている「黒田重治」の書簡は（22）（29）（53）の三つあり、そのうち（22）については檀自身が「太宰その人が書いたにちがいない」と言っている。（53）の書名は「クロ」となっているので檀は「黒田重治」の書簡とは見なさなかつたのであろう。いずれにしても（53）

も太宰の虚構であることがわかる。三つの書簡は、いずれも「太宰治」の友人として心を砕いている内容である。作者太宰は、実際に檀から貰った手紙を元に、そのような手紙を書く良き友人として「黒田重治」を造形したと言えよう。自分の手紙が引用されたことについて檀は好意的に捉えている。しかも「このような手紙を私から貰うことを希望していたのだ」と思う檀は、楽屋裏を知っている人間としてへ22へ53への書簡が自分の出した手紙を元に書かれたパロディであることも、自分の言葉が引用されることも楽しめる作家であった。しかし、檀のように手紙を引用されたことを肯定的に捉える人間は稀である。次に挙げるのは同じく手紙を引用された檜崎勤、浅見淵、小野正文の言である。

このことは私個人の打明け話になるが、たまく／＼何ページ目かで、私が太宰氏に出した葉書の文句が挿入されてある箇所につかつたのである。(発信人の名は変名になつてゐるが)(中略) 一体この小説は、どこまでが作者の創作になり、何の部分が他人の書簡をそのまゝ、挿入してゐるのかといふ、さういふ疑念に陥つた。

(檜崎勤「文芸時評」『報知新聞』昭11・7・3)

この春太宰治が文学界に発表して鬻々と毀誉あひ半ばした世評を生んだ「虚構の春」の中に、流石に名前

は変へてあつたが僕も一役買つて登場してゐるのだ。そして「虚構の春」を読んでそれを知つた時、僕は佐藤氏と同じ意味でのげしい不愉快さを覚えたのである。(中略)

「虚構の春」の中に描かれている僕は、太宰治の芸術の信奉者であり、僕の方から彼の創作集の上梓を依頼でもしたやうに取扱はれてゐるのだ。そして、事実は逆でないまでも決して左うでなかつたことは、佐藤春夫氏の場合と同じく、当時受取るたびに僕自身反つて照れたほどな、慇懃と感謝をさはめた太宰治の幾通かの手紙によつて、だれにでも僕は証明できるのである。

(浅見淵「佐藤春夫と太宰治」『早稲田大学新聞』昭11・11・25)

「文学界」に発表されたものを見ると、全然予想しないことに出会つた。手紙の全文が掲載され、しかも、原文にはなかつた文章が挿入されており、一寸、いやな気持がした。(小野正文「虚構の春」の構成と背景」『郷土作家研究』昭52・9)

仮名を使つてあつたものの、関係者には自分が書いたとわかる手紙を勝手に引用され手を加えられたことに嫌悪を覚えるのは当然であろう。その点については気の毒としか言ひようがない。しかし、文壇の事情を知らない多くの一

般の読者は、仮名を仮名のままに読みそれが誰であるか詮索する余地はなかったはずである。とするならば公の場で語られた彼らの言葉は「虚構の春」のある書簡が、彼らが書いた手紙の引用あるいはパロディであることの表明といえ、読者をして「虚構の春」書簡群を虚構ではなく事実も混入している作品という思いを強くさせ、作品の有するゴシップ性をさらに高めることとなったと言えよう。

実在であれ虚構であれ、それ自体それぞれ完結していた書簡群は「虚構の春」という場にファイルされることでテクストを構成する断片となる。「ここではプライベートな『事実』が、虚構の枠組の中に投げ込まれることによって、相対化しないしは異化され、虚構と等価のものとなる」との東郷克美の論が想起される。実在の書簡は「虚構の春」にファイルされ「虚構の春」の言葉になることで、作者太宰と発信者の間でのみ了解されていた意味を超えた意味を、読者に読まれることによって否定なく獲得する。その意味が発信者の思いもかけなかった内容であったとしても。書かれた言葉は、それが言葉という共通理解によって成立している以上、いつでも何処でも誰にでも読まれ、引用、改変されうる宿命を背負っている。そしてその言葉への理解は、読み手によって様々に異なるのだ。ある人物が書いた書簡が差出人の署名を変えられて引用・改変され他の誰か

の名前が署名された小説の一部となり、さらに雑誌の一部となり、販路に乗り、不特定多数の読者の読みに曝される。樗崎たちの嫌悪感、書き物にまつわる宿命と暴力に対する嫌悪感に他ならない。しかし、他人の書簡を集積し、小説となし得た作者太宰にとってこの宿命も暴力も自明のものであったはずである。「突然のおたよりお許し下さい。私は、あなたと瓜二つだ」で始まる〈36〉の書簡はその証左である。鎌倉での心中未遂事件を思わせる内容について語ったあと「太宰さん。おどろいたでせう？ みんなウソ。おどろかしてみたのさ。おどろいた？ ずつとまへに、君が私とお酒のみながら、この話、教へて呉れたぢやないか。」と述べさらに「はじめの感想文は、あれは、支那のブルジョア雑誌から盗んだものだが、岩の上の場面などは僕が書いた。息もつかせぬ名文章だつたらう」と言う〈36〉「清水忠治」の書簡は、その内容が「太宰さん」の話の引用、パロディであり、それがまた「虚構の春」に引用されるという書き物の流転の宿命を告知している。とするならば手紙を使用された人々は、この暴力を孕んだ創作態度の犠牲者といえよう。「虚構の春」とは、書き物をめぐる宿命と暴力とを可視化した作品名なのだ。

このような創作態度を考えるうえで山岸外史との交流は再検討の余地があるだろう。「虚構の春」の「吉田潔」は山

岸外史と推定されており、収録数は最多の八通である。二番目に多かったのが「高橋安二郎」と「長沢伝六」の四通であるから、その数は突出している。既に述べたように、山岸外史宛太宰治書簡はそれ自体創作活動に繋がるような内容であった。彼らの交遊が極めて文学的であった証拠であろう。「吉田潔」の書簡は、作品の評判が良くて天狗になっている「太宰」の態度をはげしく非難するものやへ27のように、作品を評価しているものが貼り付けられている。次に挙げるのはへ42の書簡である。

「近頃の君の葉書に一つとして見るべきものがない。非常に懦弱になつて巧言令色である。少からず遺憾に思つてゐる。吉田生」

この書簡は、山岸と太宰の手紙の性質を伝えていよう。彼らにとつて手紙は文学的格闘であり、そこには「懦弱」は許されない。山岸の著書には、自らの書簡が太宰の小説に使用されたことは、ただそれだけの当たり前の出来事として書かれてある。しかも彼らの間には「二人の会話のなかから生れた言葉で、その発信者がどちらであつたか不明になつたような言葉は、早い者勝ちに使用していい」という「黙約」すらあつたという。彼らの間には、先程述べた書き物をめぐる宿命も暴力も自明のこととしてあつただ。だからこそ会話も手紙も常に文学的緊張感があつただのだらう。

う。「虚構の春」はそうした二人の関係性の延長線上にある。

4 おわりに―別れ

戦後、山岸が太宰に絶交状を送つたことは先述したが、これは山岸が太宰に出した初めての絶交状ではなかつた。最初の絶交状は、二人の交友が始まつて間もない昭和十二年頃出された。*2 当時から批評家が「作家より一段下にいる人間のように考えられやすかつた」ことを嘆いていた山岸に「文学界」派の「A画伯」が「君は、太宰の取り巻きだつて話じゃないか」と言つたことがきっかけだつた。絶交状を受け取つた太宰はすぐに速達で、逢つて話をしたいから資生堂前の交番で待っているという内容の手紙を送つてきたという。この手紙は残っていない。迷つた末に山岸は待ち合わせ場所へ行き、結局絶交は取り消しとなつた。山岸が絶交を思いとどまつたのは、太宰の心を尽くした取りなしがあつたからであろう。しかし重要なのは山岸が太宰との関係を考える時に思う「おれは、いつたい、何者なんだ」との間である。「ぼくは君の才能を愛しているよ。そして、それを高く評価している。君はそれをよく知つてゐるはずだ。人間じゃない。君の才能なんだ。しかし、人間関係つてほんとにめんどうなものだと思つたよ」と太宰に言つた山岸は、太宰の才能も人柄も、つまりは太宰治の全て

を評価し愛した人間だった。そこに評論家としての自尊心が絡んだときの山岸の苦悩は深い。評論家として作家に魅了されるといふことはある意味恐ろしいことでもあっただろう。

二人の関係について山岸は、昭和十二年六月に行われた自身の再婚の頃が「交友の絶頂」で、その後変化していったと捉えている。そこには先程述べたような、太宰に対する山岸の複雑な心情も絡んでいただろう。しかし戦時中の二人の文筆活動の違いは、次第に遠くなる山岸と太宰の距離が文学的距離であったことを伝えている。

太宰が戦時中も自らの文学を貫いて書き続けた希有な作家であったのは周知のことである。しかし山岸は他の多くの文筆家がそうであったように、苛烈になる検閲で筆を折らなければならぬ心情に追い込まれる。山岸の最後の絶交状はそうした心情の果てに出されたのであったとしたら、太宰に対して最後まで評論家であり続けようとした山岸の矜持が看取できる。

昭和二十三年六月十三日、太宰は山崎富栄と玉川上水に入水自殺する。太宰の変を聞き、山形から駆けつけた山岸は、遺体が発見される十九日まで毎日玉川上水に通ったという。著書『人間太宰治』^{*}には、二人の遺体が引き上げられ検視にいたるまでが克明に描かれている。それは冷徹な

までの眼差しである。苦悶の表情を浮かべていた富栄の死顔と微笑を浮かべていた太宰の死顔とを見届けた山岸は「人間の死への冒瀆」を意識しながら次のように述べる。

いわば、富栄さんは「死」に対するほんとの素人であり、それだけ無邪気だったといっていると思う。そして、それだけ死に恐怖し驚愕したのである。(中略)ひとは生きている顔を、各人の責任においてつくるといふが、死顔さえも、おそらく、各人の責任においてつくるのである。太宰の仄かな微笑が、それを示している。その眉のあたりにさえ、少しの苦悩も憂愁も漂ってはいなかった。太宰は、死を、ミゴトに割りきっていたと思う。

この文章には、太宰の死を前にして最後まで評論家であり続けた山岸の姿が見出せる。「売名」と言われてもなお山岸がその場に居続けたのは、太宰をよく知る評論家としてその死の一部始終を見届けなければならないという使命感ゆえであろう。そのような山岸のあり方を考えると、山岸外史宛太宰治書簡に満ちていた緊張感について改めて考えさせられる。二人の関係は純粹なまでに文学的であった。

【注】

* 1 昭和十五年三月二十一日・二十八日、同四月五日・十

五日付山岸宛書簡。

* 2 山岸外史「人間太宰治」(昭37・10 筑摩書房)

* 3 山内祥史「年譜」(「太宰治全集」13 平11・5 筑摩書房)

* 4 山岸外史「太宰治おぼえがき」(昭38・10 審美社)

* 5 津島美知子「回想の太宰治」増補改訂版(平9・8 人文書院)

* 6 檀一雄「小説太宰治」新装版(平4・9 審美社)

* 7 山岸外史宛太宰治書簡について東郷克美は「太宰は相手によって手紙の文体を使いわけているが、山岸とは短いが緊張したアフォリズム風のことばを応酬している」(「太宰治事典」平6・5 学燈社)と述べている。

* 8 山内祥史「解題」(山内祥史編「太宰治全集」1 筑摩書房 平元・6)

* 9 鳥居邦朗「虚構の彷徨」(「国文学」昭49・2)

* 10 「虚構の春」は、あくまでも読者の視線のみを忠実になぞり返すことによって、逆に実体を失っていく作中作家の「陥没」それ自体を描きさろうとしたものといえるだろう」とする山崎正純(「反転するへ私」小説「(転形期の太宰治」洋々社 平10・1)や「太宰治」とは、作中小説家／書簡宛先／書簡群から再構成され得る作家(像)／署名／実体(論)的な作者、といった本来異なる水準を貫くシニフィアンとして、それらが抱えるイメージ・情報 の総体を意味することになるだろう」との松本和也

(「パッケージングされる作家情報／成型される作家表象」(「芸術至上主義文芸」平13・11)等の論は、書簡によって形成される太宰像が、いわゆる「太宰神話」を作り出していることを指摘したうえで、作中の「太宰治」が、書き込まれることで人間太宰との回路を断たれた表象であることを指摘している。

* 11 小野正文「虚構の春」の構成と背景」と* 8 山内祥史

によると、作中で檀崎勤は「相馬閨二」、浅見淵は「高折茂」、小野正文は「斎藤武夫」という仮名が付されている。
* 12 東郷克美「太宰治という物語」(「迷羊のゆくえ」平8・6 翰林書房)

付記 引用は筑摩書房版「太宰治全集」(平10・5)11・5)と本書に拠る。引用に際し、旧字は新字に改めた。